

## オーストラリアの印象記

富山県農村医学研究所 寺西秀豊

### はじめに

今年、4月にオーストラリアへ旅行に行く機会があった。

オーストラリアは日本からあまり遠くなく、同じ環太平洋に属する国である。面積は日本のほぼ20倍、人口は2300万である。歴史的には18世紀末のイギリスの植民まで、少なくとも4万年間、オーストラリアの先住民（アボリジニ）が居住していた。1770年にイギリスがオーストラリア東部の領有権を主張、犯罪者の流刑の地として開拓、利用してきた。20世紀に入り6つの植民地が連合して、オーストラリア連邦を形成した。現在、エリザベス2世を女王とする立憲君主制の民主主義国家である。世界で最も裕福な国の一つで、今回訪れたメルボルンは世界一住やすい都市とも言われている。

### メルボルンの印象

メルボルンへはシドニー経由カンタス航空で移動した。乗り継ぎ時間を含め、日本を出てから約12時間かかった。メルボルンには4月6日昼ころ到着したが、季節は日本と反対で、秋風がふき少し寒い感じであった。メルボルンは人口380万人の大都市であるが、ゆったりとした住宅街の広がるヨーロッパ風の街である。都市の中心には川が流れ、広々とした公園や大きな体育館がみられた。メルボルンは1956年にオリンピックが開催されたが、その施設が今も残っていた。広々とした公園には総督の邸宅がある。ビクトリア州知事は当然民主的に選挙で選ばれるのだが、この総督がエリザベス女王に州知事を推挙することによって始めて行政官としての職務にたずさわることが可能

になる。今日でも大英帝国の植民地時代の特徴が色濃く残っているのには驚かされた。

### グレートオーシャンロード

メルボルンの北西部の海岸はグレートオーシャンロードと呼ばれ、海岸線が観光地になっている（写真1）。そこに至るまでは広々とした農村部が広がっていて、牧場には牛、羊、犬などが見られた。これらの景色は、ヨーロッパの牧場を思わせるものだが、この約200年前からの移民政策の結果でもある。オーストラリアは砂漠や乾燥地が多いが、この一帯は比較的雨が多く、井戸をほると、農業に十分な地下水がえられるとのことであった。

グレートオーシャンロードの奇岩の多い海岸が観光スポットとのことで見学した。オーストラリアの海岸線が南極海にはりだし、様々な奇岩のみえる光景は、雄大で確かにフロンティア精神を刺激されるものであった。しかし、陸の方を眺めると森林は比較的単純で背丈の低いものがめだった（写真2）。オーストラリアは乾燥していて、時には気温が40度Cを超えるという。そうした時、よく山火事が発生して、一度火がつくと、広がり、なかなか消えないのだという。オーストラリアの貧困な森林は、そんなことにも関係しているのかもしれない。

### キャプテン・クックの家

キャプテン・クック（本名：ジェームス・クック）はイギリスの探検家でオーストラリアに到着、初めて上陸したヨーロッパ人として知られている。彼の育った家屋が、遠く離れたメルボルンの地に保存され博物館となっている（写真3）。メルボ

ルンはイギリスの文化と歴史をととても大切にしている。私はこのクックス・コテージを見学して驚いたのだが、キャプテン・クックは単なる冒険家ではなく、むしろ科学者の性格の濃い人物だったことが分かった。彼は長い航海では、ビタミンC不足により壊血病になることを良く知っており、その予防のために酢キャベツサワークラウト（キャベツを乳酸発酵させた食品）を用いた最初の航海士であった。彼はその業績を高く評価され、イギ

リスのグリニッジ海軍病院の院長に推挙されている。彼が上陸した海岸はシドニー近くのボタニー湾（植物学湾）とされるが、その時、同行した博物学者たちは、オーストラリアの植物相と動物相を観察し、最初の科学論文を記載出版した。しかし、そうした状況に飽き足らなかったキャプテン・クックは更なる航海を実施し、ハワイ島で先住民との争いで死亡したと言う。彼の、住民の声を聞かない強権的、英国的態度が先住民の怒りをかっ



写真1. グレートオーシャンロードの海岸



写真2. グレートオーシャンロード付近の植生

たと言う。コテージの脇の彼の銅像は当時の壮大な知性と勇気、人間性を感じさせられるものであった（写真4）。

### オーストラリアの健康と文化

オーストラリアに来てまず感じることは、オーストラリアには体格の良い、肥満の人々が多いと

いうことだろう。そのためもあってか、健康や運動に対する意識も高く、スポーツや健康のための施設も多い。メルボルン市内に Public Bath（公共浴場）と書いてある施設があった（写真5）。私も利用してみたが、それは日本で言う風呂ではなく、一種のプールであった。様々な人々が、思い思いにそのプールを利用しており、飛び込みも



写真3. キャプテン・クックの家



写真4. キャプテン・クックの銅像と筆者



写真5. メルボルン市内の Public Bath（公共浴場）と筆者

可能であった。プールに入ると、あまり暖かなく、足がつかないほど深かった。子供たちはシュノーケルを使って遊んでいた。日本での海水浴に近いものを感じた。この施設では、希望者には健康相談や食事指導の取り組みもやっているようで、成績優秀者の名前が記載されていた。

### メルボルン大学

メルボルンの中心部に多くの大学があるが、なかでもメルボルン大学のキャンパスは、イギリス風のどっしりとした、たたずまいであった。私は留学していたロンドン大学を懐かしく思い出していた。理学部に空中花粉の研究者がいることをたまたま知って、訪問してみた。Ed Newbigin 准教授が相手をしてくれたが、気さくな人で、メルボルン大学における研究や日本の無花粉スギの話などについて話すことができた。彼の研究は主に、植物の自家不和合性に関するものであった（写真6）。この自家不和合性は英語では self-incompatibility と呼ばれているが、自分の花粉が雌花についても種子が出来ない遺伝的性質のことである。自分の花粉で種子が出来ないと、外部の他の個体との交雑可能性が高まり、遺伝的に多様な優れた性格が形成されることになる。進化的

にみると、そうした性質は植物の増殖や広がりへの成功要因の一つと考えられるという。日本で発見されたスギ雄性不稔も自家不和合性と似たような性格であり、スギの進化に何らかの有意義な影響を与えている可能性も考えられるという。私は、オーストラリアで雄性不稔の進化的意義を教えられるとは夢にも考えていなかったもので、大いに驚かされた。雄性不稔スギは花粉をつくれぬ欠陥品と見ると、「不自然なスギ」との印象がもたれることも多い。しかし、大自然は、多くの不思議を内に秘めている。中生代に恐竜とともに繁栄した裸子植物の子孫であるスギがいまだに、現代日本に繁栄し続けている理由は実はこの雄性不稔のためなのかもしれないという気がしてきた。無花粉スギは決して不自然なものではない。そうした論理は多分、今後の無花粉スギ植樹に良い積極的な影響を及ぼすだろうと考えられる。

### まとめ

オーストラリアは広大な大地とダイナミックな自然にめぐまれたフロンティア精神を刺激される場所である。メルボルンはいまだに、良き大英帝国のたたずまいを残し、懐かしい記憶を呼び覚ます場でもある。日本の若者にとっても語学研修や

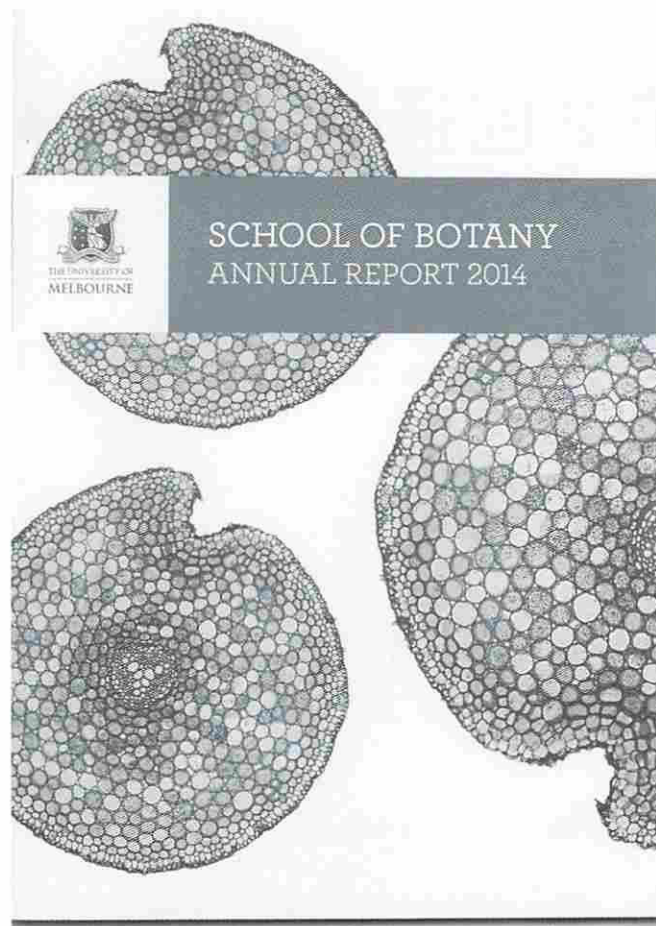


写真 6. メルボルン大学生物学部年報 2014年

ワーキングホリデーなどで人気が高い地域である。

しかし、歴史的、巨視的に見ると、ヨーロッパ風の町並みの歴史は200年程度のものである。4万年以上続いた先住民アボリジニの歴史から見ると一瞬の出来事である。今後、地球の温暖化、森林破壊などの影響により多くの生物種が絶滅するかもしれないと危惧されている。今後、オーストラリアの大自然や人々はどうなっていくのか、軽率に語ることは誰にもできない。

今回、私が訪問して感じたことは、オーストラ

リアは生命の進化や自然史を学ぶ上で面白い地域なのではないかということである。オーストラリアには多くの人々をひきつける魅力がある。人々が率直に交流し、個々人の意思と尊厳を大切にし、互いの関心をオープンにして話し合うならば、愛着がはぐくまれ、何かを生み出す力になるかもしれないという予感でもある。民間レベルでの平和的な人間的な交流と話合いが、若い人々の将来を切り開くようにも思った。